

表 9 朝鮮語学科(専攻)学生数の推移

年度	入学定員	志願者数	入学者数	在学者数	卒業者数
1977	15	39(9)	12(2)	12(2)	1
1978	15	91(23)	12(4)	22(6)	1
1979	15	45(10)	15(3)	38(9)	1
1980	15	62(13)	15(4)	51(13)	6(2)
1981	15	38(14)	14(3)	59(14)	8(4)
1982	15	66(21)	15(3)	64(13)	11(3)
1983	15	60(21)	15(8)	63(18)	16(3)
1984	15	69(28)	15(9)	63(24)	15(4)
1985	15	65(26)	15(6)	65(26)	12(1)
1986	17	97(45)	17(10)	67(33)	12(4)
1987	19	142(49)	19(9)	73(38)	17(10)
1988	20	115(49)	20(14)	74(41)	13(5)
1989	20	74(26)	20(11)	80(46)	18(11)
1990	20	252(100)	20(4)	80(37)	13(7)
1991	35	276(137)	35(20)	99(49)	18(13)
1992	35	209(100)	34(21)	115(57)	19(11)
1993	35	179(74)	35(16)	131(62)	15(4)
1994	35	212(90)	39(19)	155(77)	24(11)
1995	35	191(101)	35(22)	164(87)	42(27)
1996	35	164(85)	36(17)	158(77)	22(13)
1997	35	152(97)	35(18)	167(79)	42(19)
1998	35	185(115)	38(22)	162(82)	

出典：「東京外国語大学概要」各年度。( )内の数字は女子、内数。

学・事情各分野に専任スタッフが配置されるようになった。客員教官は、表8のとおり七八年から招聘されており、また八一年からは朝鮮大学の教員が語学・文学、歴史の分野を年度交代で担当している。

学生入学定員は一五人ではじまったが、数度の定員増を繰り返して、一九九八年四月現在、入学定員三五人を有する本学でも中規模の専攻語となっている。各年度の入学・卒業者数は表9のとおりである。

国際交流については、八〇年に韓国延世大学校、九二年に韓国ソウル大学校、九七年にウズベキスタン共和国タシケント国立東洋学大学との間に大学間交流協定を締結し、教官の研究・教育交流、留学生の相互派遣などが続けられている。

## 2 復活後の朝鮮語教育

### 朝鮮語教育の再開

五〇年ぶりに復活した朝鮮語学科における朝鮮語教育は、東京外国語学校時代の朝鮮語教育をその内容の側面において継承することなく、新たにはじめられた。一九七七年四月一日学科の開始とともに九州大学文学部から、東京外

国語大学朝鮮語学科の初代教官として着任した菅野裕臣は、一九六二年東京外国語大学モンゴル語学科卒業後、東京教育大学において河野六郎博士に教えを受けた。前章でも述べられているように、実用的な語学力によって植民地統治の末端を担う官僚を養成してきた東京外国語学校朝鮮語学科は二七年にその役割を朝鮮総督府に譲る形で幕を降ろし、「言語其物として」の朝鮮語の研究は二六年に設置された京城帝国大学において推進された。「朝鮮方言学試攷——「缺」語考——」の著者として京城帝国大学における朝鮮語の言語学的研究の進め手であり、朝鮮語の近代言語学研究の確立者小倉進平博士の高弟として戦後に朝鮮研究の学燈を継承した河野六郎博士に師事し、日韓国交回復後初期に韓国留学を果たし彼の地の国語学研究者たちとともに言語研究・調査を行った経験をもつ研究者によって復活後の朝鮮語学科における教育が開始されたことは、日本の朝鮮学の伝統を継承した朝鮮学研究を志向する朝鮮語学科のその後の教育・研究の性格を決定づけた。朝鮮をめぐる政治的・運動論的なものとは一線を画し、学問的に朝鮮に向かい合おうとする姿勢は、菅野裕臣、長璋吉、池川英勝の諸教官が当時の新入生に寄せた文章（それぞれ『東外大ニュース』三三、三六、三九号）その他からも伺えるごとく、その最初期から一貫していた。このことは実用語学の軽視を意味するのではない。七七年当時、朝鮮語の標準語及びソウルの口語の詳細な記述に基づいた市販の入門書、辞書、文法書などは存在せず、既存の朝鮮語教材は多くが日本語との類似に依拠してこれに慣れさせる体裁のものであったため、言語学的な正確さをもつ朝鮮語諸教材の作成が急先務となった。

#### 入門教材の整備

菅野裕臣によって作成され、授業用に用いられた入門教材が製本された冊子の形にまとめられたのは、朝鮮語学科が七九年に行った市民のための朝鮮語公開講座用テキストとしてであった。このテキストが母胎となり、大幅な増補

が加えられて『朝鮮語の入門』（菅野裕臣、白水社、一九八一年）が出版された。これは今日にいたるまで朝鮮語専攻の基本テキストとして使用されており、東京外国語大学における朝鮮語教育の特徴はすべて該書に起因すると言っても過言ではないと考えられるので、これについてやや詳しくふれたい。

第一に「語基」の概念の導入が挙げられる。朝鮮語の用言には、日本語五段活用動詞における未然形、連用形といった活用形と同じように語幹形成母音の交替による活用が認められる。朝鮮語の用言に日本語国文法の活用形に相当するものを認めたのは中期朝鮮語文法の最初の研究書である前田恭作（三章に既出）『龍歌古語箋』（一九二四年）が嚆矢であり、これは前出河野六郎博士によって「語基」として言語学的に定義され、日本の朝鮮語研究、特にその史的研究において使用されてきた。『朝鮮語の入門』は日本における朝鮮語研究の伝統を踏まえ、「語基」の概念を朝鮮語教育に導入することによって極めて複雑な朝鮮語用言の構造を変格活用も含めて截然と明示した。一方朝鮮本国の国語学では、南北ともに用言の「語基」による活用を認めていない。天理大学、大阪外国語大学の朝鮮語教育においても「語基」は導入されていなかった。日本の朝鮮語研究の達成の一つが教育に導入されたことになる。

第二に正書法・正音法規則の網羅が挙げられる。韓国の正書法により、ソウルの標準的な発音（八母音体系）に依拠し、初学者にとって厄介な文字と発音の規則が五一項目にわたって段階的に与えられ、かつ南北の差も詳細に示された。第三に書き言葉と話し言葉の違いについての初めての詳細な言及を挙げる。朝鮮語は書き言葉と話し言葉の差が著しいが、それ以前の朝鮮語教材は主として書き言葉中心であり、話し言葉は単なる縮約ないし省略として済まされるか全く言及されないかであった。該書は両者のレベルの違いと対応関係を明示した最初の教材であった。なお該書をはじめとして、東京外国語大学朝鮮語学では、先に書き言葉形を学び、しかるのちに対応する話し言葉形を順次学ぶという学習の順序が一貫して維持された。このことに変更が加えられるのは後述するように九八年以降であ

る。

入門教材に次いで読本、辞書その他の教材作りが急がれたが、これらは文部省教育方法等改善プロジェクトによる東京外国語大学語学教育研究協議会事業の形で作成されていった。最初に一・二年生用の読本として一九八〇年に『初級朝鮮語読本』（二七八ページ）が作られた。南北の正書法によるテキストを採り、巻末に四種の地図、田川孝三作成及び大韓民国文教部作成の年表が付された。戦後の日本での朝鮮語読本の作成は天理大学朝鮮語学科研究室編『朝鮮語読本』に次ぐものである。翌八一年『朝鮮語文法便覧』が作られた。意味用法の記述はさておき、造語接辞をも含めてとりあえず多様な文法的形式を網羅しようとしてなされた暫定的な試みである。手書きの浄書作業は学科の学生たちの参加によってなされた。八二年には『朝鮮漢字音便覧』（三五九ページ）が作成された。「朝鮮語学科の学生諸君が、ある程度中国語の知識を持つことの必要性を考慮して」（『朝鮮漢字音便覧』あとがき）中国音が付されており、またこの時期おもに二年生を対象に初歩的な中国語が教えられていた。八四・八五年には『朝鮮語慣用語集』上・下（三二四ページ・二五五ページ）が作られた。朝鮮語の学習がある程度進んで来ると悩まされることとなる学習上の困難が慣用的な表現であり、この困難を軽減するために企図された対訳慣用語集である。

朝鮮語作文教材、会話教材の作成が待たれたが、朝鮮語教育における初級、中級の画定、文法的な事項を盛り込んだ学習辞典の整備等がこれに先行ないし並行して行われる必要があった。八五年五月から八七年四月にかけて発行された月刊雑誌『基礎ハングル』（菅野裕臣編集、三修社）は初級・中級の語学講座の他に文学・歴史等のコーナーも備えた朝鮮語教育雑誌で、東京外国語大学の三枝壽勝・長璋吉・吉田光男・康仁善・金周源（ケムユウオン）の諸教官が執筆に参加している。この雑誌の「ハングル講座」部分が八七年十一月「朝鮮語を学ぼう」（菅野裕臣監修・朝鮮語学研究会編、三修社）として出版された。これによって朝鮮語のごく初級の段階で与えられるべき事項の試案が示され、つとに授

業用に作成されていた作文教材を「朝鮮語を学ぼう」の事項配列に倣って組み直し、文字・発音・正書法を新たに加えて、八七年度東京外国語大学語学教育研究協議会事業の一環として「朝鮮語初級教材」Iが作成された。かねての課題であった会話教材も「朝鮮語を学ぼう」の事項配列に従って徐尙揆<sup>ソウギョク</sup>教官によって作成された「朝鮮語初級教材」II（一九八八年度同協議会）として結実した。同書の「はじめに」に「生き生きとはしているがむずかしい会話から入るとというのが最近の外国語教授法の流行だが、われわれは文体の差の著しい朝鮮語の場合、書きことばから話しことばへと段階的に進む方が、時間はかかるが、結局は学習者の実力をつけることになると信じている」とあるように書き言葉を基礎にするという方針が貫かれている。両書はほどなく加筆され市販教材として出版され、「朝鮮語の入門」、「朝鮮語を学ぼう」とあわせて一年生初級教材として使用され続けた。

総合的朝鮮語学習辞典は長らく待たれていたが、八八年に「コスモス朝和辞典」（白水社）が出版された。菅野裕臣を中心に編まれたこの辞書は、東京外国語大学で教授されてきた文法に基づき、分離用言、受身形、副詞、可算名詞の場合の名数詞、アスペクト形といった文法事項を盛り込み、発音と変化形を示した最初の朝鮮語活用辞典である。「コスモス朝和辞典」の出現により語基の考え方に基づいた朝鮮語入門教材群が一応の完成をみるにいたった。朝鮮語学科によって作成されたその他の教材は左に示したごとくである。

朝鮮近代文学史資料	三二五ページ	八六年度
中期朝鮮語資料選	三八六ページ	八六年度
朝鮮近代詩集	二四六ページ	八七年度
朝鮮語中級読本	四一二ページ	八九年度

朝鮮語初級読本	三五―一ページ	八九年度
朝鮮語視聴覚教材	二二九ページ	九〇年度
朝鮮語文体範例読本	三七〇ページ	九一年度
朝鮮語分類基礎語彙集	三一二ページ	九七年度

朝鮮語学科における朝鮮語教育

東京外国語大学朝鮮語学科の朝鮮語教育を特徴づけてきたものとして言語教官による専攻語教育の管理統括、読解重視の二点を挙げる事ができる。

「朝鮮語の入門」の稿が一年生の授業に使用されるに際し、著者による手書きの「朝鮮語の入門」教師のための手引」が作られた。あわせて一年生のすべての専攻語授業が言語教官（菅野裕臣、のちに野間秀樹）によつて管理・統括された。そのための回覧ノートが作られ、各教官に各教材の進度、試験の指示などが与えられる。一年生の専攻語授業には言語・文学の日本人教官と外国人教官が当たり、二年生のそれは学科の全教官がこれを担当する。言語教官による一年生一学期専攻語の進度管理は現在も継承されている。教材の整備に伴い、使用教材、進度などはもちろん年を追つて若干変遷しているが、「朝鮮語の入門」を基本教材とすることに変化はない。文字と発音に関する五〇程度の項目をほぼ五月初旬までに終え、基本的な文法事項（助詞、用言の語基活用、終止形・連体形・接統形等の代表的語尾）及びそれらを含む論説文を一年生一学期夏休み以前に終了し、二学期以降は主として講読に入る。各教官ごとの年数回の定期試験、年一五回程度の単語試験が課せられる。一・二年生を通じて計三、五〇〇語程の単語試験が課せられている。総じて進度は極めて速く、学生には入学と同時に日々膨大な学習が要求される。留年する学生も決

して少くない。

一年生九月以降二年生にかけて、日本人教官が講読を、外国人教官が会話を担当する。三年生以降それぞれの専攻分野に関する諸文献を読解する力を担保するためにも、ある意味では他の三技能の訓練を多少犠牲にしても、一・二年での文法訳読方式による講読を通じての読解力養成に力が入られてきた。読解力の養成こそが他の三技能の基礎になるという考えがこの教育方法を支えてきた。外国人教官の会話授業の教材も前述のように書き言葉の基礎の上で会話を養う形式を採っている。復活以後の朝鮮語学科は、文法規則の段階的な積み重ねによって朝鮮語を正確に読み書きしうる学生の養成に努めてきたと言える。この結果、三年次以降専修専門科目での朝鮮語の論文、著作の読解等にさほどの困難を来たすことはなく、二年次の終わりには自らの考えを朝鮮語で綴ることもかなりの程度出来るようになる。しかしながら、語学学習における体的側面、発音やイントネーションの訓練等は学生個人の自助努力に多くが委ねられてきた。読解力を落とすことなく、話し、聞き能力を向上させることが、長年の課題であり、また学生側からの要望でもあった。九〇年代以降外国人教官によるクラス分け授業、文学教官によるビデオを用いた授業など漸次改善が重ねられ、九八年度以降、前期専攻語授業において、新しい入門教材の導入、話し言葉形の早期導入、ディクテーションの増加、表現させることに主眼をおいた授業など、文法訳読中心主義からの離脱が試みられはじめた。

#### 後期授業

朝鮮語学科第一期入学者が三年次に進級した七九年の後期科目は次のとおりである。

朝鮮語演習（中期朝鮮語演習）／菅野裕臣、朝鮮語演習（朝鮮現代小説演習）／長璋吉、朝鮮語演習（李朝小説演習）／金用淑、朝鮮語演習（朝鮮近代史料演習）／池川英勝、朝鮮語学概論（現代朝鮮語文法概論）／菅野裕臣、朝鮮文学概論（近代朝鮮文学史概論）／長璋吉、朝鮮文学概論（韓国国文学概論）／金用淑、朝鮮史（李朝史概説）／田川孝三、朝鮮史（朝鮮近代史概説）／池川英勝、朝鮮事情概説（朝鮮半島南北の経済）／小牧輝夫、朝鮮事情概説（在日朝鮮人の現状と当面する問題）／佐藤勝巳、朝鮮事情特殊研究（現代朝鮮の政治）／小此木政夫。

二年後八一年の後期科目は次の通りである。

朝鮮語演習（中期朝鮮語文法研究）／志部昭平、朝鮮語演習（朝鮮近代小説演習）／長璋吉、朝鮮語演習（朝鮮近代史料演習）／池川英勝、朝鮮語演習（朝鮮小説演習）／三枝壽勝、朝鮮語演習（韓国語作文演習）／金泰俊、朝鮮語学概論（現代朝鮮語文法概論）／菅野裕臣、朝鮮文学概論（韓国現代文学史概説）／長璋吉、朝鮮文学概論（韓国国文学概論）／金泰俊、朝鮮語学特殊研究（老乞大研究）／菅野裕臣、朝鮮語学特殊研究（解放前後における朝鮮文学の諸状況）／三枝壽勝、朝鮮語学特殊研究（李朝小説研究）／金泰俊、朝鮮語学特殊研究（春香伝研究）／金泰俊、朝鮮史（朝鮮近代史概説）／池川英勝、朝鮮史（朝鮮古代史）／村山正雄、朝鮮史（李氏朝鮮時代史の概説と各論）／平木實、朝鮮事情概説（韓国経済事情）／野副伸一、朝鮮事情概説（在日朝鮮人の現状と当面する問題）／佐藤勝巳、朝鮮事情特殊研究（近世日朝通交貿易史）／田代和生、朝鮮事情特殊研究（近代日朝交渉史）／姜東鎮、朝鮮事情特殊研究（近代朝鮮経済史）／高秉雲。

この八一年には朝鮮文学の三枝壽勝が、翌八二年には朝鮮史の吉田光男が着任し、言語一、文学二、歴史二名の専任教官による後期授業の体制が整えられた。八一年以降、朝鮮大学からの非常勤講師による授業が設けられ朝鮮民主主義人民共和国の言語・文学及び朝鮮史の講義が一年交代でもたれ現在にいたる。この年から非常勤講師・故志部昭平による中期朝鮮語の講義が八〇年代を通して開講された。朝鮮語・中国語・満洲語・蒙古語の対訳資料「老乞大」の講義は菅野裕臣の退官まで途中に断続した時期を含みつつも継続され、朝鮮語学科の学生のみならず、中国語学



科・モンゴル語学科の学生・院生も多くこれに参加した。

その後、表7に見られるごとく教官の赴任・移動があり、それぞれの専門とするところの授業科目が後期授業で開講され現在にいたる。その間、学科再開の翌年から八七年まで学科専任教官として朝鮮語教育に当たって来た長璋吉が八八年逝去した。生硬な言葉ばかりの朝鮮関係の書籍の中で、韓国に暮らす人々の言葉の息づかいの端々までもが魅力的に語られた長璋吉著「わたしの朝鮮語小辞典」(北洋社、一九七五年、河出書房文庫版、一九八五年)は、これを読んで朝鮮語の学習を志す人々を今も生み出している。

九八年度後期科目は次の通りである。

アジア言語研究Ⅰ(現代朝鮮語文法論)／野間秀樹、朝鮮語学研究／野間秀樹、朝鮮語講読／野間秀樹、朝鮮言語学(卒業)／野間秀樹、現代朝鮮語文法論／韓在永、統辞論／韓在永、書誌学的朝鮮語学研究／藤本幸夫、日韓対照言語研究／浜之上幸、現代朝鮮語アスペクト論／浜之上幸、現代朝鮮語口語研究／伊藤英人、中期朝鮮語文献講読／伊藤英人、朝鮮語学(卒業)／伊藤英人、アジア文学Ⅰ(朝鮮の現代文学)／三枝壽勝、朝鮮の現代文学演習／三枝壽勝、朝鮮の近代文学(卒業)／三枝壽勝、朝鮮の近代小説／芹川哲世、アジア地域研究Ⅰ(朝鮮の宗教と社会)／丹羽泉、朝鮮地域研究演習／丹羽泉、朝鮮の社会と文化(卒業)／丹羽泉、近代朝鮮の国家と社会／月脚達彦、朝鮮近代史(演習)／月脚達彦、朝鮮史研究(卒業)／月脚達彦、地域専門科目(朝鮮民主主義人民共和国の言語政策)／朴宰秀、朝鮮民主主義人民共和国の文学／金学烈、現代韓国社会論／小針進、朝鮮半島南北の経済発展／小牧輝夫、朝鮮の文化と社会Ⅱ／丹羽泉、朝鮮近世史・近代史概説／月脚達彦

表8の客員教官一覧に見るごとく初期を除いて、言語学(朝鮮語学)を専門とする研究者が前後期の授業を担当してきた。日本語と朝鮮語の類型論的類似のため、日本語話者への朝鮮語の教授は、常に対照言語学的であらざるをえ

ず、日本語の干渉による誤用例の分析など今後有効に活用しうる経験が蓄積された。

後期授業の近年の著しい変化は、多くの韓国人留學生の授業への参加である。大学間交流協定校からの留學生はことに短期留学制度によって増加し、学部・大学院を併わせ一〇名程度が朝鮮語専攻に在籍している。彼らは日本語を解さないため、近年の朝鮮語専攻後期授業のいくつかは朝鮮語で行わざるをえなくなっている。また三大講座制への移行による専攻語間の壁の撤廃は日本課程在籍の韓国人留學生の朝鮮語専攻後期授業への参加を促した。このため、韓国の大学で自国の言語・文学を学び日本語を解さないが日本の朝鮮研究の方法論を学ぶ目的をもった留學生、日本語を解しこれを専攻するが自国の言語・文学等について専門的に学んだことのない留學生、および朝鮮語専攻の留學生という三種の留學生を対象に、朝鮮語で授業を行い、朝鮮語専攻の留學生の発表も朝鮮語で行ってもらうという状況が現出している。読み書きと併わせ口頭発表能力の涵養が今後ますます要請される。

#### 文 献

- ① 本田存「韓語科卒業生近況」「校友会雑誌」(一九〇六年五月) ② 柳必根「勸学」「東京外国語学校韓国校友会会報」(一九〇八年九月) ③ S O 生「韓語科便り」「校友会会報」(一九一〇年十二月) ④ 金沢庄三郎「校友会席上ノ談話(朝鮮に於ける国語)」「東京外国語学校朝鮮校友会会報」八(一九一〇年十二月) ⑤ 長屋順耳「鮮、満、支、出張所感」「東京外国語学校同窓会々報」四(一九二二年十一月) ⑥ 上田順一郎「三十年の回顧」「東京外語同窓会会報」再興二(一九三三年三月) ⑦ 大曲美太郎「釜山港日本人居留地に於ける朝鮮語教育」「青丘学叢」二四(一九三六年五月) ⑧ 教育史編纂委員会「明治以降教育制度発達史」一(龍吟社、一九三八年) ⑨ 田保橋潔「近代日鮮関係の研究」(朝鮮総督府、一九四〇年) ⑩ 鮎貝房之進談「回顧談」「書物同好会会報」一七(一九四二年九月) ⑪ 大友歌次「校

友思ひ出草」『書物同好会会報』一七（一九四二年九月）⑫増田道義「朝鮮近代教育の創始者に就いて」（二）『朝鮮』三三四（一九四三年二月）⑬李光麟「開化僧李東仁」『開化党研究』（一潮閣、ソウル、一九七三年）⑭具良根「明治日本の韓語教育と韓国への留学生派遣」『韓』五九（一九七六年十二月）⑮梶井陟「朝鮮語を考える」（龍溪書舎、一九八〇年）⑯李光麟「李樹廷の人物とその活動」『韓国開化史研究』（一潮閣、ソウル、一九八一年改訂版）⑰李光麟「旧韓末の官立外国語学校」前掲「韓国開化史研究」⑱大村益夫「大学における朝鮮語教育の現状」『季刊三千里』三八（一九八四年五月）⑲李光麟「開化初期韓国人の日本留学」『韓国開化史の諸問題』（一潮閣、ソウル、一九八六年）⑳稲葉継雄「鮎貝房之進・与謝野鉄幹と乙未義塾」『韓』一〇八（一九八八年二月）㉑橋谷弘「一九三〇・四〇年代の朝鮮社会の性格をめぐる」『朝鮮史研究会論文集』二七（一九九〇年三月）㉒米谷均「対馬藩の朝鮮語通詞と雨森芳洲」『海史研究』四八（一九九一年六月）㉓田代和生「対馬藩の朝鮮語通詞」『史学』六〇―四（一九九一年七月）㉔琴秉洞「金玉均と日本」（緑陰書房、一九九一年）㉕李光麟「卓挺埴論」『開化期研究』（一潮閣、ソウル、一九九四年）㉖東京外国語大学百年誌編纂委員会編「東京外国語大学沿革略史」（東京外国語大学、一九九七年）㉗石川遼子「『地と民と語』の相剋―金沢庄三郎と東京外国語学校朝鮮語学科」『朝鮮史研究会論文集』三五（一九九七年十月）

史 料

- ①『朝鮮事務書』（外務省外交史料館所蔵、一―一―二、三―一―三）
- ②『明治九年朝鮮国通信使金綺秀来朝一件』（外務省外交史料館所蔵、一―一―二、三―一―〇）
- ③『朝鮮語学生養成方東京外国語学校へ囑託一件』（外務省外交史料館所蔵、六―一―一七、七）

五 朝鮮語学科の復活と朝鮮語教育

- ④ 『露清朝三ヶ国語学生養成及採用法ニ関シ文部省ヨリ協議一件』(外務省外交史料館所蔵、三―一〇―二、四)
- ⑤ 『明治十四年朝鮮国視察員朴正陽来航関係』(外務省外交史料館所蔵、一―一―二、三―一七)
- ⑥ 国史編纂委員会編『修信使記録』(探求堂、ソウル、一九七一年)
- ⑦ 『旧韓国外交文書』「日案」(高麗大学校附属亜細亞問題研究所、ソウル、一九六五―七〇年)